
旦那が寝ている間に嫁がすね毛を剃る話だと思っていた

nasa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旦那が寝ている間に嫁がすね毛を剃る話だと思っていた

【Nコード】

N7245Z

【作者名】

n a s a

【あらすじ】

旦那が寝ている間に嫁がすね毛を剃る話だと思っていた

私は夢にうなされているらしい。

暗い天井を眺めながら目を覚ますと尋常ではないほどの汗をかいている。人肌に温まった布団から出れば身震いする寒さのなかで、びっしりと汗をかいているその異様さに自分は病気ではないかと不安に思うことが何度もあった。

精神科に相談するべきかと会社の同期に相談すると年を取ればそういった悪夢にうなされるものだと言われた。

妙に納得した。

疲れているのだ。

そう思った。

それで気は晴れたが、同僚の愚痴を聞いているうちに新しい靄が頭をかすめるようになった。

悪夢にうなされる原因はなんなのか。

ストレスがないということはない。それでも、げっそりとした表情でパソコンを睨む同僚と比べれば私のストレスなど些細なものだと思ふ。子供はいないものの妻もおり、会社では役立たずと言われなほどの地位は築けている。自分では満足しているつもりだった。

そんな私が悪夢にうなされるのだろうか。

普段無口な同期が饒舌に上司の悪口を話すのを遮って精神科に行くべきだろうかと再度相談すると思えすぎだと一蹴された。

それでも食い下がり相談していると同期はそんなに言うなら一つの提案を私に教えてくれた。

その日、私はボイスレコーダーを購入した。

帰り道、これで今の悩みが少しでも解明すると落ち着いていたが、いざ家の前につき家電量販店の袋を見ると急に恥ずかしくなった。

自分がうなされているかどうかは妻に聞けばすぐに分かるではないか。

無駄な買い物をしたようだ。

隠すように鞆の中へ押し込んだ。

いつものように玄関まで迎えに出る妻に今日も寒いと呟き顔を隠すように自分の部屋へ行き鞆を放り出した。

「ご飯にしますか？」

背後から聞こえる妻の声に曖昧に頷く。

魚の小骨を取り除きながら、ぼんやりとテレビに顔を向けている妻に聞いた。

「寝ているとき」

テレビに向けていた顔を妻はこちらに向けた。

「私はうなされているか？」

妻はしばらくテレビを見ているのと同じような表情のまま押し黙っていたが「うなされているんですか？」と小首をかしげた。

「忘れてくれ」

それだけ言い、小骨を取る作業に戻った。

風呂から上がり寝室へ移動する際、自分の部屋が目に入った。放り出されたままの鞆を見て試すぐらいはやってみればいいと思い直した。

幸い、小型のボイスレコーダーを購入したのでパジャマのポケットに収まった。妻に知られる心配はない。

スイッチを入れ、寝息をたてている妻の横で目をつむる。目を覚ますと汗をかいていた。

私は額の汗だけ拭いた目をつむった。

次の日ボイスレコーダーの存在を思い出したのは顔を洗っているときだった。胸ポケットにささっているそれを見て、すぐにそれを鞆の中へ押し込んだ。

妻が玄関まで私を見送り会社へ向かった。

それを聞いたのは昼休みだった。私は昼飯を食べたのち会社から少し離れた喫茶店に入り離れた席に座るとイヤホンを耳にさした。

無音に近い静寂の中で妻の寝息が聞こえた。

それ以外の変化はなく数分程度聞いただけだったが何故か安心した。

何も変わりはないじゃないかと早送りを続ける。しばらく何の変化もなかったが、ある音に気が付いた。

柔らかいものに刃をそわせ、そつと滑らせていく。そんな音に聞こえた。遠くではなく、ずっと近くで、丁寧にゆっくりと包丁を研ぐような間隔その音が聞こえ続けた。

機械の故障かと思った。

唯一あるはずだった妻の寝息もいつのまにかなくなっていた。きっと機械の故障なのだ。

その時だろうか、私のうなり声が聞こえ始めたのは。

唸りというより、それは呻きのようなだった。助けを呼びたくとも声が出ない。自分がここにいることを懸命に伝えようとする必死さが伝わってくる。その間、刃を研ぐような音はやむこともない。

まるで動物の呻き声を聴くような感覚で私はその音を聞いていた。

気づけば夜中起きているときと同じような汗をかいていた。

息が荒くなっている。

時計を見るとすでに昼休みの時間は終わっていた。

妻に聞かなければいけない。私の不安をなくすために。

夕飯の際、私はその話を切り出した。魚の骨を取り除き、極力妻の顔を見ないようにしながら。

ボイスレコーダーの話は伏せた。単にそういう夢を見たのだと話した。隣で刃をそぐような音が聞こえたという話だ。

妻は最初、うわの空でテレビ画面を見つめていたが、音の話をするに困ったような顔をして目を伏せた。

「恥ずかしいわ」

覗くと顔を赤らめているように見えた。

「無駄毛を処理していたんです」

恥ずかしいことを言わしてしまったという罪悪感から何も考えず、ああ、とだけ曖昧に頷いた。ただ、釈然としない。歯車がかみ合っていないような、そんな歯がゆさに気分が悪くなる。

「こんな音がするのか。毛を切るだけで」

「こういうものです」

実際にやってみてくれとは言えなかった。私は曖昧に「そうか」とだけ呟いた。

「どの毛を剃っていた」

妻はようやく顔を上げた。いつものテレビの画面に見つめている目で私を見据えているようだった。

「足の毛です」

「剃るような毛があったか」

妻は全体的に毛が薄い。足に毛が生えているのは見たことがなかった。

「あなたの足です」

私は小骨を取り除く手を止めた。皿の端に積まれていた小骨を見つめた。最初温かった魚はすでに冷め切っている。

私は顔を上げた。

いつも過ごしているはずの部屋の中はこんなにも暗かったのかと思った。テーブルの上にある照明だけが明るい。私と妻を照らしている。遠くでテレビの笑い声が聞こえる。

「何のために」

妻はじっと私を見つめている。

「何のために足の毛を剃る。なぜ私の」

「気づいていないんですか？」

妻は首をかしげた。

「あなたのそういうところが嫌いです」

いつもの顔で、いつも言わないことを妻は言い席を立った。テレビの声がやけにうるさかった。

次の日も妻はいつもと変わらず私に朝食を作りテレビを見ていた。昨日のことあれからはお互いに話してはいない。

私もいつも通りに妻と接した。

テレビに顔を向けたままの妻を気にせずいつものように朝食の魚の骨を取り除く。

いつもは心が落ちつくはずの作業が、落ち着かない。魚の骨は箸でつかんでもすぐに落としてしまう。妻はそんな私を気にせずにテレビを見ていた。

皿の端に骨を積み上げながら、私は妻の方をそっと覗き見た。大きく唾をのみこんだ。

「教えてくれないか」

「何をですか」

「昨日言っていただろう。私のどういふところが嫌いなんだ」

妻は驚いたというように目を開けた。

「足を刺っていたことは聞かないんですか」

「きつと、お前なりの理由があるんだろう。それを私は聞かない。私は結婚する前からずっとお前のすることを信じていた。何事も消極的にしか考えられない私をいつも引っ張ってくれたのはお前だ。今回もそうなんだろうと思う」

「誰かにそういうようアドバイスでもされたんですか？」

「違う」

私は箸を置いた。顔を上げ妻と目を合わせる。久しぶりに真正面から妻の顔を見た気がした。彼女の顔は若々しい。

「私は不器用だ。お前とは違う。思っていることを言葉にするのも苦手で仕方ない。いつも言葉足らずになっていると自分でも思う。だから」

ふふ、と妻は小さく笑みをこぼした。

「そんなに必死なあなた久しぶりに見ました」

顔が真っ赤になってるのが自分でもわかった。

「分かってくれていたのならいいんです」

「そうか」とだけ答え、私は逃げるように身支度を整えた。

玄関まで送りに来た妻を見てドアを開けた。

「あなた」

背後から妻が呼び止めた。

「いつてらっしゃい」

久しぶりに聞く言葉だった。私はいつからこの言葉を聞いていなかったのか。それが普通になっていたのか。

私はしばらく放心したように突っ立っていたが、やがて小さな声で呟いた。

「いつてきます」

久しぶりに言ったにもかかわらず、すんなりと出てきたように思う。

それから悪夢にうなされることがなくなることはなかったが、前よりも汗の量は減ったように思われた。少しずつだが、いい方向へ向かっているのかもしれない。

妻は朝に玄関でいつてらっしゃいと言ってくれるようになった。戻るとおかえりなさいと言ってくれるようになった。

私もまだ声は小さいがそれに返している。

仕事はいつも通り。生活もいつも通りだった。

私はいつものように社員食堂で魚の骨を取り除いている。

「やけに顔色がよくなったな」

前の席に座った同期は私を見るなりそういった。

「悪夢にうなされるのはなくなったのか」

「いや、いつも通りだ。うなされる」

「なんでそんな嬉しそうに言うんだよ。おかしなやつだな」

同期はいつものように上司の愚痴を言い始めた。私はそれを聞いているようで聞いていない。今日は妻にケーキでも買って帰ろうと

考えていた。何の記念日でもなかったが、自分からそうしたいと思った。

「あの塗り薬のおかげで俺も助かったよ」

同期の愚痴はまだ続いていた。

「……塗り薬？」

会話の形式上おうむ返しで聞き返す。

「知らないか。最近ニュースで取り上げられてるあれだよ」

「最近テレビは見えてない」

「死んでからも薬物反応が出ない薬が出たんだってさ」

少し興味がわいてきた。

「それが塗り薬でさ。体中にある毛を剃ってから専用のバターナイフみたいなので一か月ほど毎日塗っていけば、塗られた人は心臓発作で死ぬんだってよ。完全犯罪だよ。完全犯罪。それで最近は、要介護爺さん婆さんの死亡率がやけに高い。あと未亡人が増えたんだと」

何がおかしいのか同期は嬉しそうに笑う。

「うちの上司も、奥さんにそれやられて死んじまったんだよ。名目上はただの心臓発作だけだな」

カラカラと同期が笑う。

「お前も奥さんに嫌われないよう気をつけろよ」

同期の笑い声と一緒にどこからうなり声が聞こえてきた。

それが自分の口から洩れていると気づくのにしばらくかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245z/>

旦那が寝ている間に嫁がすね毛を剃る話だと思っていた

2011年12月25日22時45分発行